

1 研究テーマ

子どもを支える保育—評価を通して—（2年次）

2 研究テーマについて

評価の必要性

近年、幼児教育の重要性について認識が高まり、就学前教育の大きな改革が進んでいる。その動きの中で、各幼稚園等において運営の改善・発展を図る取組とともに幼児教育の質の向上が求められている。令和2年2月17日に出された「幼児教育の実践の質向上に関する検討会」の報告書では、「幼児教育の質の評価の促進」として幼児教育の質の評価に関する手法開発・成果の普及について、「子供の学びの過程と教職員の指導、施設の運営や環境等に対する評価を行う際の観点や方法に関する指針や留意事項等を作成するとともに、幼児教育の質に関する評価のしくみを構築することが重要である」と述べている。幼児教育の質の確保・向上を目指すうえで日々の保育を評価することは欠かせない。各園においても幼児教育の質をどのように捉え、どのような実践を行っていくのか、また、それをどのように評価するのが大きな課題となっている。

保育の評価のしくみ

評価について、幼稚園教育要領では、「第4指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」の中で、「幼児の実態及び幼児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図ること」や「指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること」と記されている。このような幼稚園教育を取り巻く状況の中、本園では、昨年度から研究テーマを「子どもを支える保育—評価を通して—」とし、保育記録やカンファレンスなどの検討を通して、保育を評価するしくみを整えた。平成30年度末に完成した教育課程や年間指導計画に沿って保育実践を行い、その保育が幼児の育ちを支えることにつながっていたか、保育記録やカンファレンスをもとに振り返り、保育改善を進めてきた。本園における評価のしくみを構築したことは、保育改善のサイクルとともに教師の専門性を高めることにもつながった。

保育を評価する際の考え方～本園における保育の評価観

研究1年次、保育を評価するしくみを整える中で、どのように幼児の豊かな育ちを支えたと判断するのか、幼児の姿と教師の指導のかかわりのレベルで検討することまでできなかった。幼児の育ちを支えていくには、まず、幼児のどのような姿に価値をおき、どのような力をはぐくむのか、職員間で目指す方向を具体的に共通理解して保育に臨む必要がある。そして、その姿や力に照らして、自分たちが行った環境構成や援助を評価し改善することが欠かせないが、教師が行った援助などをどのように判断したらよいのか、その考え方を整理していくことが課題と考える。今年度は、こんなふうに育ってほしいと考える姿に照らして、教師が行った援助や環境構成などが幼児の育ちや学びを支えるものになっていたか、またはそのための改善になっていたのか、判断する考え方、すなわち保育の評価観といえるものを探っていきたい。

3 研究計画

第1年次（令和元年度） 「保育を評価する手立てを探る」

- ・これまでの保育記録の見直し・検討を通して、保育記録が振り返る際の有効な資料となり得るために必要な内容と様式を見出す。
- ・保育の情報を共有し保育改善につながる効率的なカンファレンスのもち方を検討する。
- ・保育記録やカンファレンスの取組を活かして、保育を評価するしくみを探る。

第2年次（令和2年度） 「保育の評価観を見出す」

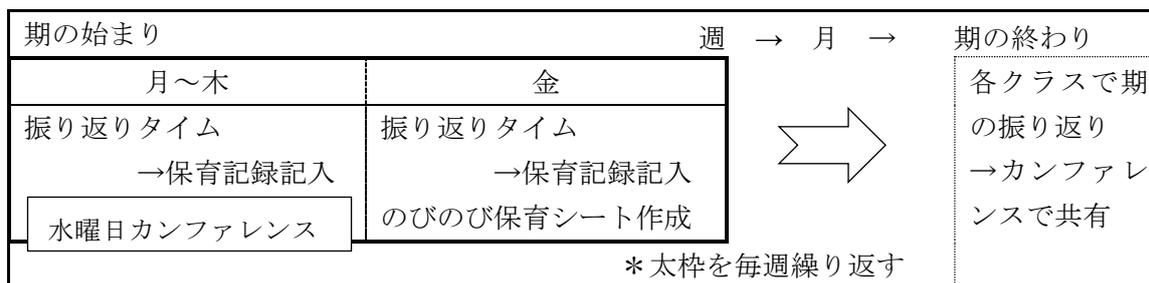
- ・本園における保育の目指す目標や方向性について、具体的な共通認識を得る。
- ・保育を評価する際に、適切な保育だったと判断するための考え方（評価観）を整理する。

4 第1年次の研究

平成30年度末に完成した新しい教育課程と年間指導計画に沿って実践を進めながら、日々の保育について振り返り、保育記録に残す内容や記述の仕方を検討してきた。その結果、以下のことが見えてきた。

本園における保育の評価のしくみ

本園では、保育における評価を「幼児の発達する姿に照らして、教師が行う環境構成や援助が適切かどうかを振り返り、改善を図っていくこと」と捉えた。そして、保育を振り返る具体的な資料である保育記録と、保育についてより多くの教師で語るカンファレンスの見直しと検討を進めてきた中で、本園における保育を評価するしくみが整えられてきた。それが次の表である。



しくみを構成する4つの取組

①保育記録

毎日10分の振り返りタイムを設け、副担任とその日の保育について振り返った。自分の保育を振り返る材料である保育記録がより有効なものとなるためには、右の5つの視点について記録することが必要であることが見えてきた。毎日書き加えていくことにより、幼児がどのように遊びを深めていったのか、遊びへの興味がどのように移っていったのか、そこから幼児の内面を読み取り、援助を考える改善のサイクルが回るようになった。



②のびのび保育シート

これまでの週案を、保育記録をもとに保育を改善するサイクルが視覚的にも分かる様式に変え、「のびのび保育シート」と呼ぶことにした。

①「保育記録」

1週間分をまとめた保育記録をデータ化し記載。

②「教師の振り返り」

その週の中で話題になったことや気付いたことなどを「教師の振り返り」として、保育記録の横や下に記述。

③「次週に向けて」

①②の振り返りをもとに、次週に向けて考えたことや意識したいことなどを記述。

④「週の計画」

①②③を受けて作成した次週の計画を記述。

毎週作成し、一年間の保育の改善を足跡が蓄積される。期の振り返りでは、その蓄積したのびのび保育シートをもとに行っている。また、他の教師がどのように幼児の姿を捉え、どのような心もちで援助しているのか、情報を共有するツールになっている。



③カンファレンス

毎日行う 10 分の振り返りタイムと水曜日に行うカンファレンスの 2 種類のカンファレンスを行ってきた。立場や経験年数に関係なく、自分の迷いなど話したいことを話す中で、自分の保育を多面的に捉えたり主観を磨いたりすることにつながり、保育に活かすようになった。また、無理なく続けられるように短時間で効率よく行ってきた。

カンファレンスのPoint

- 時間を意識する
- 「話したい」ことから話す

<水曜カンファレンス>

- ・ 茶話会の雰囲気を大切に
- ・ 誰でも気軽に話す
- ・ 話題は保育についての迷いや悩み、面白さなど、何でもOK

④期の振り返り

保育を改善するサイクルを繰り返しながら、期の終わりには、その期全体を通して幼児の姿の変容や教師が行ってきた環境構成や援助についてまとめの振り返りを各クラスで行った。日々週とは違った、期という長いスパンだからこそ捉えられる幼児の姿があり、また教師の援助についても長い目でその効果を検証することができた。

5 研究方法（第2年次）

(1) カンファレンスでの語り合い

水曜日のカンファレンスの中で、幼児のどのような姿に価値をおきどのような力をはぐくみたいと思っているのか、目指す姿や力を具体的に語り合い、共通認識を得ていく。そして、その姿や力に向かって保育を進める中で、実際の保育場面を取り上げながら、目指す方向に対して、教師の環境構成や援助が適切だったことを何をもって判断するのか、評価する考え方を全員で話し合い、整理していく。

(2) 保育記録の蓄積と事例の集積

日々の保育を振り返る際の具体的な資料として、遊び保育記録を活用する。それをもとに、教師が行った援助や環境構成などが幼児の姿に照らして適切だったと判断できる手がかりを探ることができるのではないかと考える。

また、保育実践からエピソードの収集を行い、保育を評価するときの考え方につながる事例を残していく。

(3) 大学教員との連携による研究推進

本学幼年教育領域コースの教員からのアドバイスを受けながら研究を進めていく。保育実践者である本園教師と研究者である大学教員の双方が意見を述べ合うことで、より質の高い保育を目指すことができると考える。研究の進め方や事例の捉え方について、大学教員の意見を聞きながら保育実践や資料の集積を進めていく。

(4) 研究保育と研究会の実施

年2回行っていた研究保育では、今年度も研究協力者の方以外にも広く保育公開を実施し、参観者や研究協力者から保育についての意見や本園の研究について助言を得る。また、10月には幼児教育研究会を実施し、本園の保育や研究について参会者や研究協力者からの意見をいただき、保育や研究の方向性について考える機会とする。

昨年度の研究を通して、どのような幼児の姿を目指して保育を進めていったらよいのか共通理解ができていないという課題が見えてきた。そこで今年度は、本園における保育の目指す方向性や考え方を見出すべく研究に取り組んできた。研究の取組と見えてきた成果について示す。

取組① 保育の評価観を導き出すカンファレンス

保育の評価への考え方について、みんなで語り合うカンファレンスを通して導き出そうと考えた。そこで、マーガレット・カーの著書『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』（大宮勇雄・鈴木佐喜子訳 ひとなる書房 2013年）に載っていたアセスメントモデルを参考にすることにした。これは、幼児をアセスメントするためのモデルだが、幼児のしていることを「幼児の学び」という視点に立って見るというところに、幼児の姿に照らして援助の改善を行っていく本園の保育に通じる点を感じ、保育の評価を考える観点として活用することにした。そのアセスメントモデルを参考にした観点に沿って、カンファレンスを行った。カンファレンスでは、事前に観点に沿って、それぞれの考えを付箋に書いて持ち寄り、KJ法を用いて語り合いながら共通認識を導き出した。マーガレット・カーのアセスメントモデルを参考にした保育の評価を考える観点とカンファレンスで得られた本園の共通認識は次の通りである。

マーガレット・カーのアセスメントモデルを参考にした観点	カンファレンスで得られた共通認識
1 何を目的に保育の評価を行っているか	幼児の自ら育とうとする力を支える
2 幼児期の大切な学びの成果をどのようなことだと考えるか	「よりよく生きる力」の基礎を育む
3 保育の中でどのようなことに焦点を当てて援助しているか	幼児のしていることを肯定的に捉える
4 どのように妥当性を確認しているか	職員の語り合いによって共感・合意を得る
5 保育の質の向上をどのように捉えているか	幼児の姿をもとにした援助のレパトリーが広がる
6 どのように評価しているか	本園の保育を評価するしくみ（「保育記録」「カンファレンス」「のびのび保育シート」「期の振り返り」のサイクル）に沿って行う
7 教師にとってどのような価値があるか	みんなが笑顔になれる

この共通認識はこれまでも本園で大切にされてきた内容であり、本園の保育を評価する際の指標になると言える。

取組② エピソード事例の検討

カンファレンスは、教師それぞれが保育場面を想起しながら考えを語り合うものだった。そこ

で得た共通認識が実際の保育場面でも言えるのか、保育記録からエピソードを取り上げ、事例に書き起こして検証することにした。エピソード事例は実際に行われた保育実践における教師と幼児の姿を記録した事例である。教師はエピソード事例を各期に一事例書き、それを互いに読み合っていて、幼児の姿の読み取りや援助に向かう考え方など大切だと思った部分や共感した部分にそれぞれがマークを入れコメントを残した。そして、それぞれがマークしたポイントやコメントを一つに集約し考察を加え、「エピソード事例～やっぱりそうだね納得版」としてまとめた。「エピソード事例～やっぱりそうだね納得版」から、自分たちの保育をどのように捉えているのか、それぞれが保育をするうえで大切だと考えマークしたポイントが、私たちが保育を振り返って幼児の育ちにつながったのか判断するときの視点にもなっているということが分かった。また、エピソード事例の検討から得られた本園の保育の特徴的な考え方とカンファレンスから得られた共通認識と照らしてみると、そこに共通性があることも見えてきた。

＜4歳クラス V・VI期 4月＞ 「1児の遊びの『場』をとらえる」	
<p>これまでの保育の様子</p> <p>新型コロナウイルス感染症による影響で、保育の始まりが5月11日からとなった。感染を防ぐ対策から、荒天の場合を除いて、遊びのほとんどを屋外で過ごすことになった。4歳クラス児には、昨年遊んだ経験から、比較的スムーズに遊びを始め、池でのオタマジャクシの捕まえや園庭の草花を使った料理づくり、砂場や土山での土遊びなど、様々な遊びを楽しんだ。3歳から5歳まで、すべての幼児が園庭で遊ぶため、異年齢のかわりも多く、一緒にブランコを楽しんだり、オタマジャクシの捕まえ方を年上の幼児から教えてもらったりする姿も見られた。</p> <p>新しい環境での遊びに慣れ始めたころ、副担任との振り返りで屋内での遊びとの比較が話題になった。例年、この時期は折り紙や廃材をつかった製作遊びに興味が湧く姿が見られる。そうした中で、年中の幼児が始める「お店屋さんごっこ」に興味をもった幼児が、遊戯室などで自分のつくった製作物を使って店を出し始めるのである。しかし、屋外遊び中心の今年、お店屋さんごっこに発展する様子が少ないと感じていた。草花料理などの製作物はあるものの、それを置いたり店として出したりするスペースがなかったからではないかと考えた。変わってきた机を保育室前のテラスに置くなどして工夫してみたが、保管場所にはなかったものの、期待した姿は見られなかった。お店屋さんごっこのような、他の幼児とのかわりを必然とする遊びは、人とのかわり方を知る、遊びのルールを知るといった、この時期の幼児の育ちに大切な要素も持っている。どのような援助を行うことで、遊びを広げることができるのか、担任と副担任は常々模索しながら保育を行っていた。</p> <p>ある日、5歳保育室のテラス前に人がかきかきできていた。たくさんの幼児が手に色水の入ったボトルを持っている。A児がその近くで様子を眺めていた。</p> <p>5月28日</p> <p>【教師：「いろいろ集まってるね」】 A児：「先生、私もやりたい」5歳クラス児が集まる方を見て言う。 教師：「何して遊んでるのかな？」 A児：「色水遊びだよ」 教師：「へえ、色水なんだ。Aちゃんもやりたいの？」 A児：「うん、先生も一緒に付いてきて」 A児と遊びの輪の中に行く。 教師：「おもしろいね」</p>	<p>ochieko 自然と遊びの中で異年齢のか</p> <p>ikuko 異年齢との関わりができる。</p> <p>ikuko 幼児の行動や思いを予想して</p> <p>ochieko 「これでよい」と一人で判断</p> <p>hhiromi 保育の評価（振り返り）が日</p>

取組①と取組②から見えてきたこと

カンファレンスとエピソードの二つの検討から、私たちが保育を行っていく中で、目指しているものが言語化され焦点化された。保育の評価とは、目指している幼児の姿や保育のあり方に照らして行うものと考えているため、二つの検討から得られた共通の考え方が本園における保育の評価観として、保育を評価する際の拠り所になると言える。しかし、これは現時点の考え方であり、また一度見出したからといってそのまま固定化するものではないと考えている。評価の考え方も、保育の振り返りと同じように、私たちが目指す保育につながるものとなっているのか話題にしながらか更新し続けていくことが必要であり、それが保育の質の維持・向上につながるのだろう。

そして、今年度の研究の取組であるカンファレンスとエピソード事例の検討のどちらにも、教師みんなが検討に加わった。毎回のカンファレンスに全員が揃うことは難しかったが、「本園で保育を行っている教師全員で本園の考え方を導き出す」という思いのもと、研修のもち方を工夫してきた。そうした進め方により、保育の評価観について一方的に与えられるのではなく、教師一人一人が自分事として捉えることができたというのも成果と言える。だからこそ、評価の考え方が浸透し、更新できるのだと考える。

令和2年度 「子どもを支える保育～評価を通して(2年次～)」

保育を評価する考え方を導き出す検討プロセス

ここでは、今年度研究の過程を示す。

今年度研究のテーマについて【4月14日研修(各クラス担任、養護教諭)】

研修事項	検討結果
・今年度研究のテーマ	・育ってほしいと考える姿に照らして、教師が行った環境構成や援助が幼児の育ちを支えるもの、またはそのための改善になっていたのか判断する考え方(保育の評価観)を探る。 ・研究の表題はそのままとする。

<検討プロセス①>

昨年度は、本園における保育の評価のしくみを整えた。その中で、本園では保育における評価を「幼児の発達する姿に照らして、教師が行う環境構成や援助が適切かどうかを振り返り、改善を図っていくこと」と捉えた。しかし、担任と副担任とで、行った援助の背景にある思いや意図、その後の方向を共有する中で、何をもって適切だったと言えるのか、それを判断する考え方がはつきりしないという課題が浮かび上がってきた。振り返りタイムや水曜カンファレンスを通して、幼児の姿に照らして援助を振り返ることと幼児の姿の変化を捉えて援助の効果を考えていくことを全員で理解したが、深く検討することはできなかった。そこで今年度は、昨年度の課題であった、保育をどのように判断するのか、本園での保育を評価する考え方を探っていくこととした。

今年度研究のテーマと方法について【4月16日研修(白神先生、各クラス担任、養護教諭)】

研修事項	検討結果
・今年度研究のテーマと方法	・『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』(マーガレット・カー著 大宮勇雄・鈴木佐喜子訳 ひとなる書房 2013年)にあるアセスメントモデルを参考とする。 ・アセスメントモデルにある観点に沿って教師間で意見交換をし、本園の保育の方向目標について共通理解していく。「考え方をそろえる」のではなく、それぞれの考えをアウトプットし語り合うことを通して、共通認識を形成していく。

<検討プロセス②>

いざ保育を評価する考え方を探るとなると、幼児の姿をもとに考えることは全員で確認していたものの、どのように考え方を探っていくのかその方法が難しい問題となった。本学の研究協力者の指導を得ながら、評価は目標に対して行うものという原点に立ち返ることにした。私たちは、このような姿に育ってほしいという願いやねらいをもち、その目指す姿に照らして、目の前の幼児の発達する姿を捉え必要だと思われる援助を行っている。そして、その幼児の姿と行った援助の関係性を振り返りながら評価し改善を重ねていく。私たちが何を目標に保育を行っているのか、その方向を具体的に共通理解するところから始めることにした。そこで、参考としたものが、マーガレット・カーの著書『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』(大宮勇雄・鈴木佐喜子訳、ひとなる書房 2013年)に載っていたアセスメントモデルである。カーは、「学びの物語」(ラーニングストー

リー)という幼児の新しい評価理解(アセスメント)方式を考えた人物である。日々繰り返されてきた園生活の中での「学び」を幼児の目線に立って書き綴った、幼児が主役の物語を通して保育を評価しようというものである。幼児のしていることを「できる、できない」の視点から見るとは、幼児の「学び」という視点に立って見るということに、幼児の姿に照らして援助の改善を行っていくという本園の保育に通じる点を感じ、保育を評価する視点として参考にすることとした。そのアセスメントモデルの観点に沿って、まずはそれぞれの教師が自分の考えていることをアウトプットし、その後、カンファレンスでの共通理解を深めることを通して、方向目標に対しての共通認識が見えてくるのではないかと考えた。

今年度研究の進め方について【4月21日、5月12日研修(各クラス担任、養護教諭)】

研修事項	検討結果
<ul style="list-style-type: none"> 今年度研究の進め方 	<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルス感染症による在宅ワークのため、カンファレンスができない現状を踏まえ、マーガレット・カーのアセスメントモデルに沿ったアンケート調査を行う。 何に向かって保育をしているのか目指す目標・方向について、共通理解していくことから始める。 アンケート結果をもとに、考えを書いた付箋を持ち寄りKJ法を用いてカンファレンスを行うこととする。

<検討プロセス③>

カーのアセスメントモデルの言葉を用いてアンケート調査を行い、職員一人一人が自分の考えを書くところから始めた。一つ一つの項目に回答することにより、普段の保育では深く意識しないようなことも改めて言葉にすること(アウトプット)になり、自分の考えを自覚する機会となった。

令和2年度 「子どもを支える保育—評価を通して—」 アンケート

名前 ()

新型コロナの影響で、未だ新学期が始められない状況ですが、今年度の研究はスタートさせよう
と思います。評価のしくみを整えた昨年度に続き、今年度は幼児の豊かな育ちを支えたと判断する
にはどのような考えからか、みんなで広く出し合い整理していきます。
そこで、まず私たちは何に向かって（どのような姿を目指して）保育を進めているのか、具体的に
語るところから始めます。というわけで、さっそくアンケート!ご協力よろしく願いいたします。
難しく捉えずに、保育をしているときの感覚で簡単にお答えください。

1 何を目的に保育を行っていますか。

2 幼児期の大切な学び（遊び）の成果はどのようなことだと考えますか。

3 保育の中で、どのようなことに焦点を当てて援助していますか。

4 どのように妥当性を確認していますか。

5 幼児の成長をどのように捉えていますか。

6 どのように評価をしていますか。

7 保育者にとってどのような価値がありますか。

マーガレット・カーのアセスメントモデルを活用した保育を評価する考え方についてのアンケート

アンケート調査のまとめ

1 何を目的に保育を行っていますか。

- ・子どもたちが、園での生活を通して家庭とは異なる集団（同年齢や近い年齢の友達）における生活の中で、社会とかかわっていけるような力を育むための基盤づくり。
- ・ひとりひとりの興味、関心に寄り添いつつ、子どもの成長（新しい発見、友達とのかかわり、身辺自立 全て含む）につながるため。
- ・幼児一人一人が心身ともに健やかに成長すること。
- ・豊かな心を育めるよう、子どもの育ちを支えていくこと。
- ・初めての集団生活の中で新しい環境や人、もの等に触れながら、子どもの成長を見守り、支えていくこと。
- ・子どもの育ち（個に応じた発達段階を意識しながら）
- ・社会生活の基盤となる力を育てるため

2 幼児期の大切な学び（遊び）の成果はどのようなことだと考えますか。

- ・入園時には「できなかった」ことが修了時には「できる」ようになること。また、幼児期以降の学校を始めとする社会生活に適応していけるようになること。
- ・挑戦してみようという気持ち。実際に行動してみる行動力、実践力。失敗する。失敗からの学び。成功したときの達成感。友達と協力する。友達とのかかわりの中で感じる共感（喜び、悲しみ）
- ・遊びの充実によって今しかできないことを楽しむこと。その結果、様々な資質・能力を身に付けること。
- ・満足感や達成感を得る。次の意欲につながる。
- ・遊びを通して、気付いたり考えたり自分の力でやり遂げようとしたり、友達同士で試行錯誤したりしながら、経験したことは幼児期の大切な学びの成果であると思う。
- ・社会性が育つこと
- ・達成感、満足感、自信、安心

3 保育の中で、どのようなことに焦点を当てて援助していますか。

- ・子どもたちが遊ぶ内容（遊び）も大切な視点ではあると思うが、それ以上に「友達」や「保育者」とのかかわり方、つながり方に焦点を当てて援助できるように心がけている。
- ・ひとりひとりの気持ち、考えに寄り添いつつ、興味を向けていないことについてもタイミングを見て知らせしていく。
- ・安心感をもって遊べるように。自分で考えたり自分で（周囲の人とともに）試行錯誤して遊びが充実するように。
- ・子どもの思いやイメージを読み取れるようにすること。
- ・個々の幼児を受け止め、寄り添いながら援助している。
- ・子どもの気持ち
- ・自分で決断、行動しようとしているか。たとえ、教師の助言があっても、「自分で決めた」と思っているか。教師の損得で判断していないか

4 どのように妥当性を確認していますか。

- ・子どもから返ってくる反応（即時点あるいは経時的）や、他の保育からの実践に対する評価からの確認する機会が多い。
- ・子どもの遊びの変化や成長する姿（成長が見られない姿）を通して、自分の保育（援助）を確認している。
- ・援助後の子どもの姿や保育後の振り返りで。
- ・振り返りの中で。自分一人だと「これでよかったのかな」と迷う部分があるが、振り返りで共有することで方向性を確認できる。
- ・全ての幼児に対し、同じ目線で向き合っている。
- ・子どもが納得して行動できたとき。子どもの表情や行動の過程。
- ・振り返りや研修で共通の理念に基づいた保育が行え、それが幼児の行動に変化を与えた、または信念をもったと判断できたとき。

5 幼児の成長をどのように捉えていますか。

- ・全体の中における子どもではなく、子ども個々に着目し（スモールステップを踏んでいく中で、前進・後退を含め）過程で成長を捉えている。
- ・かかわり方次第で成長の方向性もスピードも変わる。
- ・一人一人の遊びや生活の姿から遊び込みや「こんなふうに育ってほしい」姿と照らして発揮したり伸びたりしているところを見付ける。
- ・遊びの中で様々な経験、人とかかわりを通して2のような姿や豊かな心が育っていく。
- ・日々幼児とかかわることで小さな変化に気付いたとき。
- ・個に応じて、できるようになったことが確認できたとき。
- ・長期的にみて、行動に変化が見えていくもの。自己決定によって行動していることで変化が見られたもの

6 どのように評価をしていますか。

- ・実践直後で評価できることは現時点ではないと感じている。時を経て、かかわった子どもに何らかの変化が見られたとき、自分の中あるいは他の保育者と一緒に振り返ることで評価することが多い。
- ・子どもの遊びの深まりや日々の成長の様子を振り返ってどのように変化しているか、その変化はどのような援助がかかわっていたのか考える。
- ・保育記録等による中長期の振り返りやカンファレンス
- ・振り返りの中で話すことが評価につながっていると思う。記録が残っているため、「このときのこの援助がよかった」など、振り返りやすい。
- ・幼児の援助をしている中で、できなかったことができるようになった瞬間を目の当たりにしたときに達成感を感じる。
- ・保育終了後の話し合いで、他の先生に理解を得られたとき。
- ・試行錯誤、没頭、協同を促す保育になっているか。自己決定を促す保育になっているか

7 保育者にとってどのような価値がありますか。

- ・一緒に保育を実践した保育者による評価や実践を見ていた第三者からの評価（専門家や保護者も含む）。
- ・評価することによって、自分の保育を客観的に振り返る機会になる。よかったこともよくなかったことも、次の日以降の保育に生かすことができる。
- ・自分の保育を評価し、真に幼児のため、幼児の成長になっているかを見つめることになる。
- ・不安や迷いを共有できる。自分の保育を振り返り、よりよいものにするにはどうしたらよいかを考えるきっかけになる。
- ・自分自身の保育に対する反省が向上心につながっている。
- ・少しずつ援助に自信がもてること。
- ・自分の保育を客観的に見つけ、他者評価を受けられる。不安がなくなる

マーガレット・カーのアセスメントモデルを活用した保育を評価する考え方についてのアンケート回答

アンケート調査をまとめたものを全員に配付し、他の教師の考えも分かるようにした。項目①では、回答の多くに「健やかな」「成長」「豊かな」「心」「豊かに育つ」といった言葉が入っていた。ほとんどの教師が全人的な育ちのイメージを抱いており、その姿を支えようと考えていることが分かった。項目②では、「学びの成果」を問われたが、1名が「できなかったことができるようになる」と回答し、その他は「挑戦」「行動力」「失敗からの学び」「遊びの充実によって身に付けた資質・能力」「満足感・達成感、意欲」「社会性」といった、いわゆる非認知能力といわれる内容が挙げられていた。項目③では、質問の意味の受け止めがさまざまだったのか、回答もその受け止めによって全く内容が異なるものになっていた。項目④の自分が行った援助の妥当性については、子どもの姿（即時的あるいは長期的のどちらも含む）から判断するというものと保育の振り返りでの語り合いから判断するという2通りの回答に分かれた。項目⑤では、個々の育ちの過程で見られた姿やその変容から捉えるという内容の回答が多かったが、中には指導計画にある「こんなふうに着てほしい姿」に照らして見付けるという回答や教師のかかわり方次第で成長の方向性もスピードも変わるといった回答もあり、「成長」の捉えについてもさまざまな考えが見えた。項目⑥の「どのように評価をしているか」の問いでは、ややもすると幼児の姿を評価しかねない文言だったが、全ての回答者が自分の保育を評価する視点で回答していた。内容は、項目④の回答と重なるところがあったが、幼児の姿、保育記録をもとにした他の教師との振り返りやカンファレンスを通して、自分が行った援助と幼児の姿の関係性を読み取りながら評価しようとするものが多かった。項目⑦では、他の教師との振り返りや対話の中で、自分の保育が幼児のためになっているのか見つけ直す機会にしたり、あるいはそのやりとりを他者からの評価と受け止め、次に活かそうとしたりする様子が見られた。回答からは、保育者自身の専門性の向上につながるような意識が見られた。

これをたたき台として、今後アンケート項目一つずつについてカンファレンスでの語り合いを行

い、共通理解を深めていくことにした。

共通認識を導き出す検討【5月20日水曜カンファレンス（各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員）】

研修事項	検討結果
・アンケート項目①のカンファレンス	・アンケート項目①「何を目的に保育を行っていますか」について、それぞれの保育者が園の方針をもとに何を大事にして保育を行っているのか語り合った。その結果、本園では「自らの育とうとする力を支える」ことを念頭に保育を行っているという共通認識を得た。

<検討プロセス④>

一人10枚程度の付箋を事前に配り、アンケート項目①に対して自分の考えを記述して持ち寄った。一人ずつ付箋を提示しながら自分の考えを話し、同じような考えのときにはまとめて付箋を貼っていった。その中で、他の保育者の考えにも触れることになり、「そうそう！」「分かる、分かる」といった言葉も聞かれた。

カンファレンスでは、「何を目的に保育を行っているか」の問いに対して、本園の職員は、まず、幼児一人一人のあるがままの姿を受け入れ、幼児が安心感や信頼感を得られることを大切にしていることが分かった。次に、「興味や関心」「やってみようという気持ち」「したいことを見付けられる」と言ったキーワードが並び、幼児自身が周りの環境に目を向け、それにかかわろうとする気持ちを育てようとしていた。そして、「やりたいことを納得いくまでやる」「失敗を恐れずに挑戦する」「様々な感情を知る」など、周囲の環境とのかかわりを通して個人の内面が育ち充実していくことを重視するとともに、「言葉で相手に伝える」「友達のしていることに興味をもつ」など友達とかかわる力を育もうとしていた。その中でも、「課題を解決するために友達の考えを受け入れる」「自分の気持ちに折り合いをつける」など、友達とよりよくかかわろうとする力を意識していることが見えてきた。また、個の充実から他者との協同へと目指すサイクルはちょうど発達の様と重なるが、3歳から5歳へとただ直線的に進むのではなく、そのサイクルが3歳、4歳、5歳のそれぞれの発達段階においても細かく回っているのではないかと考えた。このカンファレンスにおいてもさまざまな姿が挙げられた。しかし私たちは、それをスキルとして身に付けさせるのではなく、子どもが発達していくそれぞれの段階で、子ども一人一人に内在する力の発揮を目指していることを確認し、「自ら育とうとする力を支える」ことを共通認識として得ることができた。これまでなんとなく意識していたことを、カンファレンスの語り合いの中で言語化し、改めて自分たちが目指しているものが具体化された。



項目①「何を目的に保育を行うのか」についてのカンファレンスで話し合われたこと

共通認識を導き出す検討【5月22日研修（白神先生、各クラス担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
<ul style="list-style-type: none"> アンケート項目①のカンファレンスの進め方や内容について振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> 項目①②については、そのままの言葉でも伝わるが、それ以降のアンケート項目では分かりにくい言葉がある。回答を得ているが、カンファレンスのときには文言を分かりやすいものにして、提示する必要がある。 アンケート項目一つずつについて語り合うことは、意識してきたことを言語化し、共通認識を形成するには有効であることを確認した。 カンファレンスを通して得た本園ならではの方向目標や評価していく考え方を示すエピソードが必要である。

<検討プロセス⑤>

1回目のカンファレンスの振り返りを行った。カンファレンスで多くの教師が自分の考えや思いを語り合い、それに共感したり新たに自分たちのしていることの意味を見出したりしながら、目指す方向を意識し自覚していく作業はとても明快で誰もが納得できるものだった。今後もこの方法で研究を進めていくこととした。

また、研究保育の際に、他の研究協力者から「評価観というのは、新しくつくるものではない。言語化していないものをどう明らかにするか、意識してきたことをどう評価に載せていくかがポイ

ントだ」という指摘があった。1回目のカンファレンスの結果から得られた手応えに近い意見であり、カンファレンスでの「語り合い→共通認識」という流れの有効性を改めて確認した。

共通認識を導き出す検討【6月9日、6月11日研修（各クラス担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
・アンケート項目③④の文言と内容並びにカンファレンスの持ち方の検討	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート項目③にある「焦点」という言葉が分かりにくい。援助する上で大切にしていること、心がけていることなど、それぞれの考えを多面的に語るができるよう場面の違う写真を提示することにする。 ・アンケート項目④にある「妥当性の確認」という言葉が分かりにくい。アンケート項目③のカンファレンスで、具体的な場面を想起して援助の焦点について考えるならば、その援助をどのように判断するのか考えることを「妥当性」という言葉で表現してもイメージできるのではないか。

<検討プロセス⑥>

項目③については、「焦点」という言葉の受け止めがそれぞれ異なっていたため、回答もさまざまだったことから、アンケートの文言を検討することにした。しかし、「焦点」という言葉を「大切にしていること」「心がけていること」などの言葉に置き換えても、教師の心情や心もちといった大きなイメージで捉えられかねないと考えた。カンファレンスでは具体的に語り合うことを目的としているため、本園でよく見られる実際の保育場面の写真を2、3枚提示し、同じ場面で自分ならば何を大切にしているかのような援助を行うのかを考え語り合うこととした。項目④については、最初のアンケート実施時から「妥当性」という言葉をどう受け止めたらいいか難しいという声が聞かれていた。しかし、項目③で同じ場面でもどのような援助を行うか語り合った後に、その援助をどのように判断したらよいか考えるという流れならば、援助の「妥当性」という言葉もイメージできるのではないかと考え、言葉を変えないこととした。

共通認識を導き出す検討【6月29日研修（各クラス担任、養護教諭）、7月7日研修（白神先生、各クラス担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
・アンケート項目⑤⑥の文言と内容並びにカンファレンスの持ち方の検討	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート項目⑤について、「幼児の成長をどのように捉えているか」とは「保育者がどのように見るか」ということ。幼児を評価することではないことに留意する。 ・アンケート項目⑥の「どのように評価しているか」の部分で「評価」という言葉に対するそれぞれのイメージの違いが懸念された。しかし、昨年度から「保育における評価」について研究を進めてきているので、目標に対しての評価であるという視点を伝えることとする。

<検討プロセス⑦>

項目⑥について、文言の中に「評価」という言葉があると、教師がかかわろうとする、あるいはかかわった場面の幼児の姿をよかったか悪かったかという視点で捉えてしまうのではないかと懸念された。しかし、アンケートのこの項目に全員が保育を評価する視点で回答していることから、昨年度から保育における評価について研究に取り組み、評価に対する捉えは浸透してきていることがうかがえた。カンファレンスでは保育を評価する視点であることを確認し、文言は変えないことにした。

共通認識を導き出す検討【7月1日水曜カンファレンス（各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員）】

研修事項	検討結果
・アンケート項目②のカンファレンス	・アンケート項目②「幼児期の大切な学び（遊び）の成果はどのようなことだと考えますか」について、それぞれが考えていることを語り合った。その結果、本園では「よりよく生きる力の基礎を育てる」ことという共通認識を得た。

<検討プロセス⑧>

項目②のカンファレンスでも、項目①と同じような方法で話し合いを行った。学びの成果と考えたことを付箋1枚に1つずつ書き、それをみんなで突き合わせながら語っていった。すると、本園では、まず「子どもが安心感を得てほしいことを見つけて遊び出す」、「興味・関心、意欲をもつ」といった「個の内面」を意識して育もうとしていることが見えてきた。それとともに「自分のしたいことや気持ちを言葉で伝える」「共感する」「友達と一緒に問題を解決する」などの内容から「集団としての育ち」もあると捉えた。しかし、語り合いが進むうちに、「集団としての育ち」と捉えるよりも、「友達とよりよくかかわろうとする力」として、個人の中の社会性と捉えた方が納得がいくようになった。それらは、最初のアンケート回答のように、やはり非認知能力と言える内容であり、それぞれの発達段階に応じて育まれていくものであるが、年齢が進むことにより育まれる場面や能力の内容も複雑になっていくと考えられた。カンファレンスを通して私たちは、「個の内面の充実」と「友達とのかかわり」を学びの成果として捉えていることと、これらは幼児がよりよく生きていく力の基礎となるものであり、それを意識して育もうとしていることが共通認識として得られた。

② 乳幼児に大切な学びの成果とは

3~5歳ごろのおなまが見られる
 場面内容の複雑化
 個の成果と集団の成果がある
 個の中に集団の育ちが内包される



項目②「幼児期の大切な学びの成果とはどのようなことか」についてのカンファレンスで話し合われたこと

共通認識を導き出す検討【7月8日水曜カンファレンス（各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員）、7月9日研修（各クラス担任）】

研修事項	検討結果
<p>・アンケート項目③のカンファレンス</p>	<p>・アンケート項目③「どのようなことに焦点を当てて援助していますか」について、2場面の写真を用意してカンファレンスを行った。場面に沿って具体的に援助を考えていったが、遊びごとに特徴的な援助があるわけではなく、どの遊びの場面でも援助に向かうときに心もちが変わらないという共通認識を得た。それは、「子どもがしていることを肯定的に捉える」とまとめることができる。</p>



① 幼児理解
 あつてこそ
 援助できる
 その場

① 可成りしているの
 だろうと見る。
 ② 状況をつかむ。
 かわって遊んでいそうならあえて
 何もしないこともある。
 ③ 個に依って場に依って
 必要と思われる援助を
 考える。

問題解決に向けて。
 ① ②
 ③ ④
 ⑤ ⑥
 ⑦ ⑧
 ⑨ ⑩
 ⑪ ⑫
 ⑬ ⑭
 ⑮ ⑯
 ⑰ ⑱
 ⑲ ⑳
 ㉑ ㉒
 ㉓ ㉔
 ㉕ ㉖
 ㉗ ㉘
 ㉙ ㉚
 ㉛ ㉜
 ㉝ ㉞
 ㉟ ㊱
 ㊲ ㊳
 ㊴ ㊵
 ㊶ ㊷
 ㊸ ㊹
 ㊺ ㊻
 ㊼ ㊽
 ㊾ ㊿

項目③「保育の中でどのようなことに焦点を当てて援助しているか」についての
 カンファレンスで話し合われたこと

＜検討プロセス⑨＞

提示する写真は、雨どい遊びと砂土を使ったままごと遊びの場面を選んだ。どちらも本園でよく見られる遊びであり、どの職員も見たり実際にその場面に行ったりすることが多く、それぞれの視点で援助を具体的に考えやすいと思ったからである。そして、その遊びの場面の中でも、遊び始めや援助が必要だと思われる場面の写真を選んだ。カンファレンスでは、これまでと同じように、それぞれの場面ごとに考えた援助を付箋に書き、ままごと場面から語り始めた。すると、「この場面というよりは、どちらにも言えることかもしれないけれど・・・」と話し始める職員が多く、結局、「どちらにも言えること」として、2つの写真の間に付箋が貼られた。その内容を見ると、まず「子どもの遊んでいる様子を見る」「子どもの思いを知ろうとする」「状況の読み取り」を行い、そこから「承認や称賛、励ましなどの言葉かけ」「子ども同士の思いを仲介」「問題を焦点化する言葉かけ」「子どもと一緒に考える」などの援助を行うことが見えてきた。ここでは、意外にも遊びごとに特徴的な援助があるわけではなく、どの遊びの場面でも援助は変わらないという認識を確認することとなった。正確に言えば、遊びの内容によってかける言葉も手伝う内容も変わってくるのだが、援助を行う教師の心もちは遊びごとには変わらないということだろう。援助する際に何を大切にしているのか整理してみると、まずは遊びの状況やそこにいる子どもの思いを知ることに焦点を当て、その理解や把握をしてから子ども同士のかかわり具合を見て、援助の内容を考えていることが分かった。本園の教師は、子どもの内にある思いを読み取り個に働きかけながら育ちを促していくことと、子ども同士のかかわりの中で育っていくもの、それぞれを大切にしていることがカンファレンス①②

からも見えていたが、実際の保育場面においてもその視点に立って援助を考えていたことが見えた。子どものさまざまな力を育む遊びの支援と個への支援を同時に行いながら、その根底にあるのは、幼児のしようとしていることを学びの視点で肯定的に捉え、その成長を促そうとしている思いであった。

共通認識を導き出す検討【7月31日研修（各クラス担任）、8月4日研修（白神先生、各クラス担任、養護教諭）、8月7日、8月21日研修（各クラス担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
<ul style="list-style-type: none"> ・エピソード事例とポイント版の作成について 	<ul style="list-style-type: none"> ・エピソードは、子どもの姿の読み取りから抱いた教師の願いと、それをもとにした環境構成や援助について詳しく記述する。なぜこのエピソードを取り上げたのか、その理由が評価の考え方につながっていくと思われるので、蓄積していくことによって評価の考え方の根拠となる。 ・エピソードの中で多くの教師が共感した本園らしい考え方や援助はカンファレンスで得た共通認識とつながるのではないかと考える。エピソードを教師間で読み合い、本園らしい特徴にマークをしたバージョンも作成する。

<検討プロセス⑩>

日々の保育記録からエピソードを取り上げ、幼児の姿の読み取りから教師がどのような願いをもち、どのように環境に込めたのかといった教師の援助や保育の方針などに焦点を当てて詳しく事例に書き起こした。3歳エピソード「友達への関心とかかわりを支える」、5歳エピソード「戸惑いを安心へ」では、幼児のしていることの意味を読み取りながら環境を整え援助する背景に、「人とよりよくかかわれるようになってほしい」「主体的に遊ぶ中でさまざまな経験をしてほしい」という教師の願いが根底にあることが分かる。教師は、そうした姿が見られることを幼児の学びの成果として捉え、目の前の幼児の姿をもとに援助を考えながら、長期的な視点に立って育もうとしている。4歳エピソード「幼児の遊びの『場』を捉える」では、遊びの場が整うと幼児の遊びが充実してくると読み取った教師が「遊びの場」に焦点を当てて援助を重ねて追求していくことが記されている。

また、本学の研究協力者の指導により、カンファレンスで共通認識を導き出したように、エピソード事例でも互いに読み合って共通の考え方を見出し、カンファレンスで得た共通認識との関連を検討することにした。議論を通して見出された共通認識が実際の保育場面のエピソードからも見えたとしたら、それが本園で大事にしている保育の考え方であり、評価観につながるものと言える。まず各クラスのエピソードを教師間で読み合い、それぞれが本園での特徴的な援助や考え方だと思ったところにマークする。そして、それらを一つに集約し考察を加えたバージョンを作成し、全員で共有することにした。

＜4歳クラス V・VI期 4月＞ 『幼児の遊びの『場』をとらえる』	
<p>これまでの保育の様子。</p> <p>新型コロナウイルス感染症による影響で、保育の始まりが5月11日からとなった。感染を防ぐ対策から、荒天の場合を除いて、遊びのほとんどを屋外で過ごすことになった。4歳クラス児には、昨年遊んだ経験から、比較的スムーズに遊びを始め、池でのオタマジャクシ捕まえや園庭の草花を使った料理づくり、砂場や土山での土遊びなど、様々な遊びを楽しんだ。3歳から5歳まで、すべての幼児が園庭で遊ぶため、異年齢のかかわりも多く、一緒にブランコを楽しんだり、オタマジャクシの捕まえ方を年上の幼児から教えてもらったりする姿も見られた。</p> <p>新しい環境での遊びに慣れ始めたころ、副担任との振り返りで屋内での遊びとの比較が話題になった。例年、この時期は折り紙や廃材をつかった製作遊びに没頭する姿が見られる。そうした中で、年上の幼児が始める『お屋さんごっこ』に興味をもった幼児が、遊戯室などで自分のつくった製作物を使って店を出し始めるのである。しかし、屋外遊び中心の今年、お屋さんごっこに発展する様子が少ないと感じていた。草花料理などの製作物はあるものの、それを置いたり店として出したりするスペースがなかったからではないかと考えた。使わなくなった机を保育室前のテラスに置くなどして工夫してみたが、保管場所にはなかったものの、期待した姿は見られなかった。お屋さんごっこのような、他の幼児とのかかわりを必然とする遊びは、人のかかわり方を知る、遊びのルールを知るといった、この時期の幼児の育ちに大切な要素を持っている。どのような援助を行うことで、遊びを広げることができるのか、担任と副担任は常々模索しながら保育を行っていた。</p> <p>ある日、5歳保育室のテラス前に人がたかりができていた。たくさんの幼児が手に色水の入ったボトルを持っている。A児がその近くで様子を眺めていた。</p> <p>5月28日。</p> <p>教師：「いっぱい塗まってるね。」 A児：「先生、私もやりたい」5歳クラス児が集まる方を見て言う。 教師：「何して遊んでるのかな？」 A児：「色水遊びだよ。」 教師：「へえ、色水なんだ。Aちゃんもやりたいの？」 A児：「うん、先生も一緒に付いてきて。」 A児と遊びの絵の中に行く。</p>	<p>ochieko 自然と遊びの中で異年齢のか</p> <p>ikuko 異年齢との関わりができる。</p> <p>ikuko 幼児の行動や思いを予想して</p> <p>ochieko 「これでよい」と一人で判断</p> <p>hhiromi 保育の評価（振り返り）が日</p>
	

エピソード事例にポイントをマークする過程で、自分たちの保育をどのように捉えているのか、それぞれが保育をするうえで大切だと考えたマークポイントを詳しく見ていくと、本園での保育における目指す方向や特徴などが見えてきた。そしてそれらは、保育を振り返って判断するときの視点になるもので、カンファレンスで導き出した共通認識と通じるように思われる。前述の3歳のエピソードは、項目②のカンファレンスで得た共通認識「よりよく生きる力の基礎」につながる考え方であり、4歳と5歳のエピソードは、項目③のカンファレンスで得た「幼児のしていることを肯定的に捉え」て援助していることにつながるエピソードだと言える。

共通認識を導き出す検討【8月21日、8月27日研修（各クラス担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
<p>・教育目標、「こんなふうに育てほしい」、目指す方向性の関係の整理</p>	<p>・教育目標や、それを期ごとに具体的に表した年間指導計画の「こんなふうに育てほしい」という姿は、目標とする幼児の姿である。共通認識として導き出しているのは保育の目指す方向性であり、目標とする幼児の姿を実際の保育場面ではどのように捉え、その姿を支えるためにどのように援助していくのかといった考え方である。</p> <p>・そうした援助に向かう考え方が明らかになると、その考え方が保育を評価する際の視点になると考える。</p>

＜検討プロセス⑪＞

これまでの研修で、アンケート項目①「何を目的に保育を行っているか」のカンファレンスで得た共通認識「自ら育とうとする力を支える」と、教育目標や年間指導計画との関連について指摘があった。そこで、それらの関係を整理することとした。

本園の教育目標「元気な子ども」「やさしい子ども」「考える子ども」の姿を発達段階ごとに具体的に表したのが、年間指導計画の各期に記載されている「こんなふう育てほしい」姿であ

る。教育目標は最終的に到達するゴールのようなイメージではなく、子ども一人一人がますます元気でやさしく考えていく子どもへと一回りも二回りも大きく育っていくイメージと捉えた。教育課程に記載されている、「3歳『なれる』4歳『ひろがる』5歳『たかまる』』という言葉は、発達する姿を捉えた1つの指標と言える。では、カンファレンスで得てきた目指す方向性の共通認識が、それらとどのように関係しているのかと考えると、一回りも二回りも大きく育っていく幼児の姿が目標ならば、その姿を支えるためのあらゆる考え方やそれに基づいた行為が保育の目指す方向性と言えるのではないだろうか。カンファレンスでは、具体的な幼児の姿を語り合い、その姿の具現に向けて自分たちの援助の方向を共通認識として見出した。私たちは、「自分で育とうとする力を発揮してほしい」という願いを絶えずもちながら、幼児や場面を見て「育とうとしているものは何か」「よりよく生きる力にかかわるものは何か」を瞬時に具体的に考え、その力の発揮に向けて、幼児のしていることの意味を肯定的に捉えながら援助を考えているという教師側の視点で話し合ってきた。本園における保育の目指す方向性として共通の認識を導き出してきたが、それらは目標の姿に向かって幼児が育とうとする過程を支えるという教師側の視点で捉えたことで導き出されたものであり、教師の心もちと言えるものかもしれない。

共通認識を導き出す検討【9月2日研修（各クラス担任、養護教諭）、9月14日研修（白神先生、各クラス担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
・エピソード事例にポイントをマークする形式とそのネーミングについて	・それぞれの教師がマークしコメントした内容は、全部脚注として残す。マークが重なった箇所は色を濃くする。マークの色が濃かった部分にコメント欄を設け、考察を記す。 ・ポイント版を「エピソード事例～やっぱりそうだね納得版」と名付けることにした。

<検討プロセス⑫>

各クラスのエピソードを教師間で読み合い、それぞれが本園での特徴的な援助や考え方だと思った部分にマークしたものを一つに集約し考察を加えたバージョンを作成した。その体裁として、それぞれの教師がマークしコメントしたものを脚注を設けてそこに残すことにした。また、マークしたポイントが何カ所にも及ぶことから、教師が4人以上マークしたポイントに考察を加えることにした。そして、エピソード事例と区別するために、教師みんなで読み合った結果「やっぱりそうだったね」と納得を得たバージョンであることから「エピソード事例～やっぱりそうだね納得版」と呼ぶことにした。

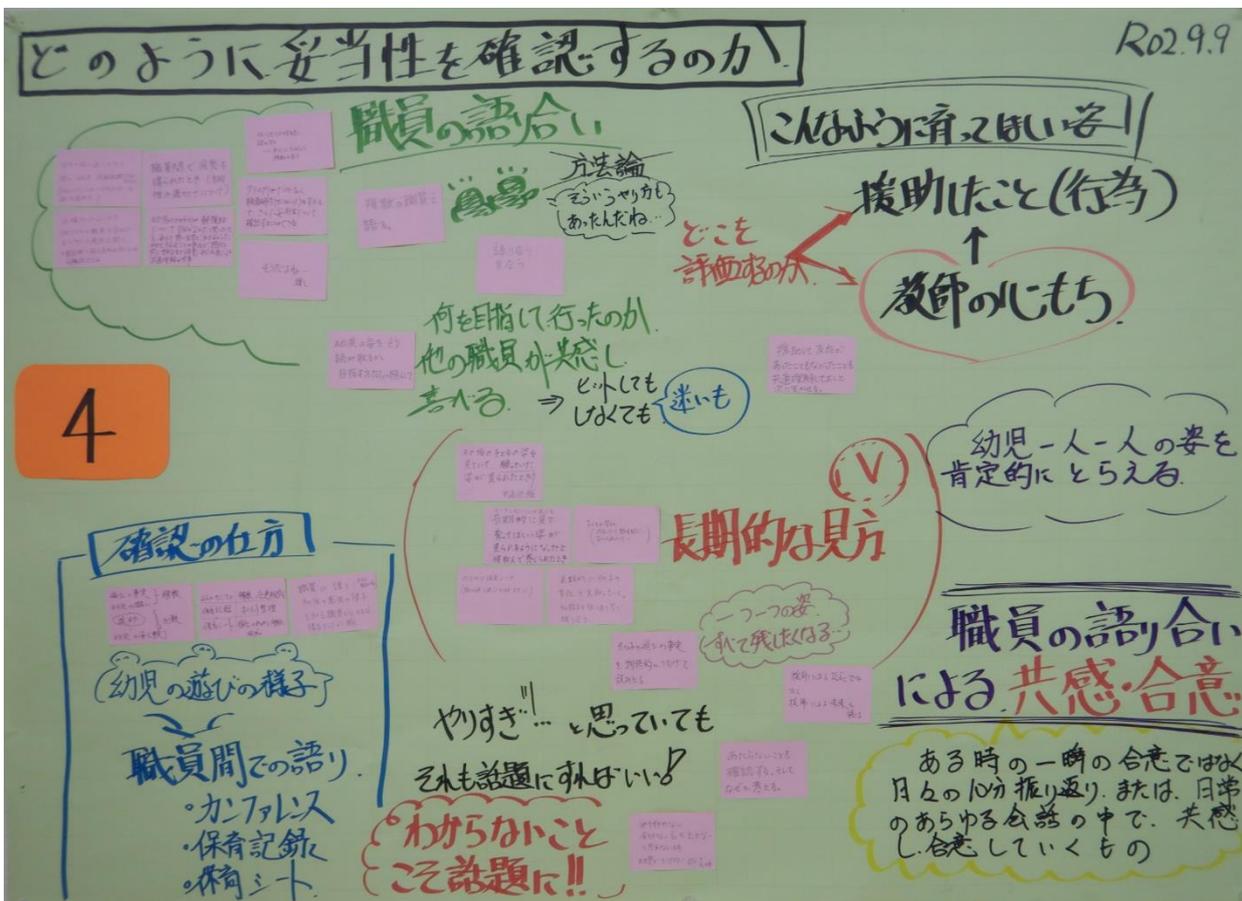
共通認識を導き出す検討【9月9日水曜カンファレンス（各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員）】

研修事項	検討結果
・アンケート項目④のカンファレンス	・アンケート項目④「どのようにして妥当性を確認しているか」について、カンファレンスを行った。その結果、「職員の語り合いによる共感・合意」という共通認識を得た。

<検討プロセス⑬>

項目④については、アンケートの実施段階から「妥当性」という言葉をどのように受け止めたらよいのか難しいという声があった。そこで、「妥当性」という言葉をイメージできるように、項目③で保育場面の写真を見て、自分だったらどのような援助を行うかという視点で具体的に語り合い、それからその援助をどのように判断したらよいのかカンファレンスを行うことにした。

カンファレンスでは、多くの教師が、担任と副担任で行う「振り返りタイム」や「水曜カンファレンス」での語り合いを幼児の姿の読み取りや自分が行った援助の妥当性について確認できる場として挙げていた。振り返りタイムや水曜カンファレンスの場で、幼児の遊びの様子を語り、そこから読み取った意味について語り合う中で、他の職員が考えを受け止め共感することもあるれば、受け止めつつもさらに違う援助を提案することもある。その意見交換の中で自分が行った援助の意味や効果が見えてくるが、即時的な見方だけでなく長期的に振り返ることでその意味や効果も変わってくるという指摘もあった。日々繰り返される職員同士の振り返りの中で、お互いの幼児の捉えや援助の背景にある願いに共感し合意がなされることを確認し、「職員の語り合いによる共感・合意」が援助の妥当性の確認のために必要かという共通認識に至った。



項目④「どのように妥当性を確認しているか」についてのカンファレンスで話し合われたこと

共通認識を導き出す検討【11月5日研修（各クラス担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
・アンケート項目⑤⑥⑦の文言	・保育をどのように判断するのか、その考え方を明らかにして

について	<p>いくための項目だが、「幼児の成長」という尋ね方だと幼児を評価するように見えるのではないかという指摘があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「どのように保育の質の向上を捉えるか」といった保育の質にかかわることが分かる文言にし、カンファレンスを行うことにする。
------	--

<検討プロセス⑭>

マーガレット・カーのアセスメントモデルを応用して、保育を評価する考え方を導き出す視点として活用した。これまでのカンファレンスでは、保育を評価する視点で話し合いが進んでいたが、項目⑤「どのように幼児の成長を捉えるか」という言葉が幼児の評価を尋ねるように思われることが話題になった。そこで、保育を評価する言葉に置き換えようと検討し、「どのように保育の質の向上を捉えているか」という言葉にした。

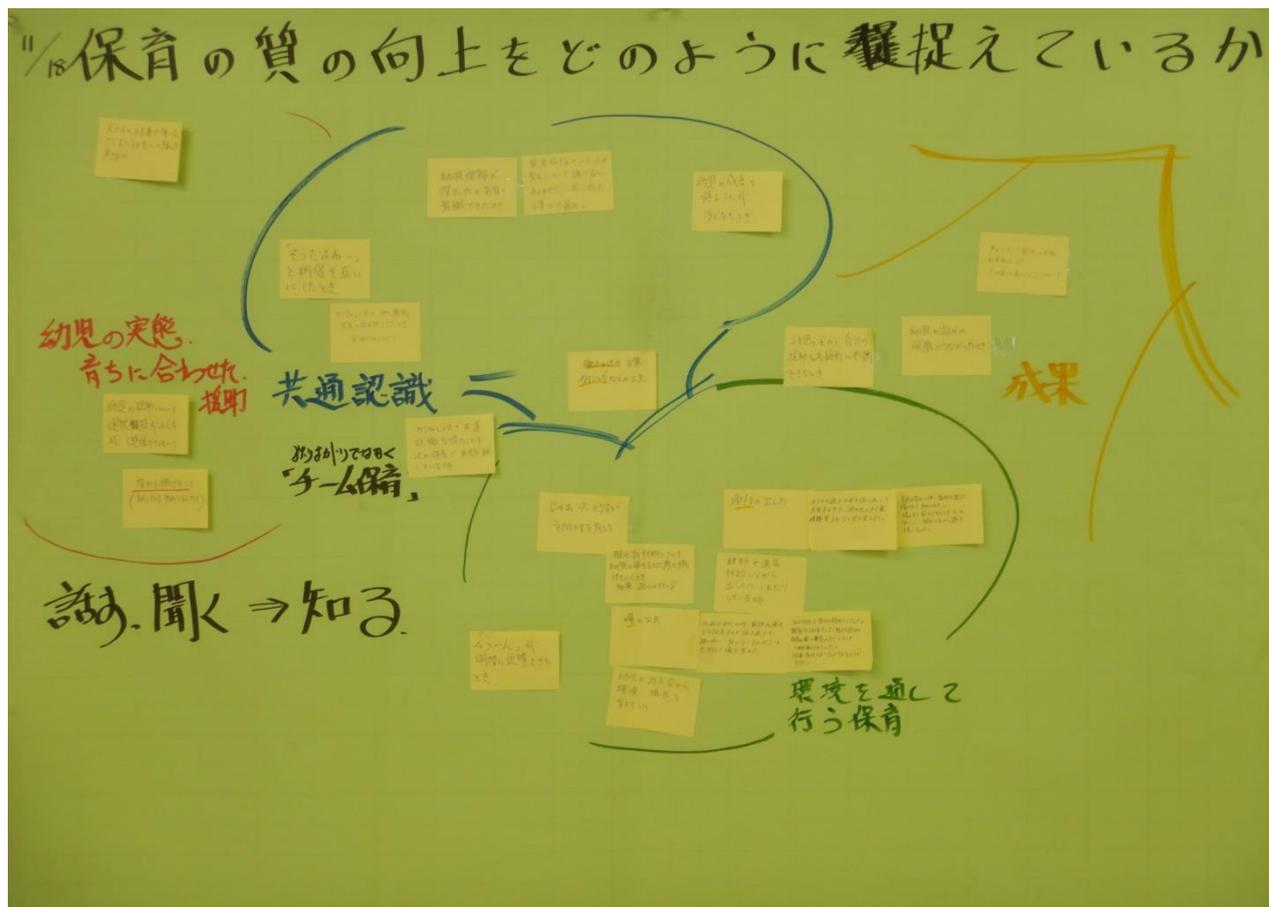
共通認識を導き出す検討【11月18日水曜カンファレンス（各クラス担任・副担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート項目⑤のカンファレンス 	<ul style="list-style-type: none"> ・「どのように保育の質の向上を捉えているか」についてカンファレンスを行った。その中で、自分一人の考えや判断で保育を行うのではなく他の教師と共通の認識を得て保育を行うこと、幼児や遊びの様子を見て援助や環境構成の内容を工夫していくこと、保育の手応えを幼児の姿から得ることなどが本園では保育を行ううえで欠かせないこととして共通の認識を得た。 ・アンケート項目⑤の共通認識として端的にまとめるには内容が多かったことから、その後検討することとなった。

<検討プロセス⑮>

カンファレンスでは、まず、「幼児理解が深まったとお互い意識できたとき」「お互い納得できたとき」など、幼児の姿や育ちの様子、またそれに基づいた援助について、他の教師と共通の認識が得られるといった内容の付箋が並べられた。自分の考えや主観だけで保育を行っていくことは、振り返ってみると果たしてそれで幼児の育ちを支えたと言えるのか、教師にとって不安になる部分もある。本園では、担任と副担任、また他のクラスの教師と幼児の様子や援助の方針を共有し、お互いに共感や納得を得ながら保育をしていくことが幼児や遊びの様子の読み取りの妥当性を確保することになり、保育にとってもプラス面として考えていることが見えてきた。続いて、「廃材などの材料や道具の出し方」や「環境構成」「場の工夫」など、これまでの援助に幼児の姿をもとにして考えた工夫や改善を加えていくことができたという内容が、具体的な例とともに話題になり話し合われた。本園の教師は、これまでの保育の経験から遊びに合わせて援助や環境構成を固定するのではなく、目の前の幼児の姿や育ち、教師の願いに照らして工夫したり変えたりしていくことが幼児の育ちを支えるうえで最も大切なことと考えていた。そして、「幼児の姿から自分の援助を客観的に判断できたとき」「幼児の遊びの発展につながった」など、幼児の遊びの様子や姿から、工夫した援助や環境構成が幼児にとってどのような効果があったのか判断していた。手応えを感じたときもあればうまくいかないと感じるときもあるが、絶えず援助の方向性や内容を考え実践し続けていくこ

とを多くの教師が大事に考えていたことが分かった。付箋に書かれたことをグルーピングし、一つ一つについて互いの意見に共感しながら語られていたが、それらを共通認識としてまとめるには内容が多く、その後検討を要することとなった。



項目⑤「保育の質の向上をどのように捉えているか」についての
カンファレンスで話し合われたこと

共通認識を導き出す検討【11月25日水曜カンファレンス（各クラス担任・副担任、養護教諭）】

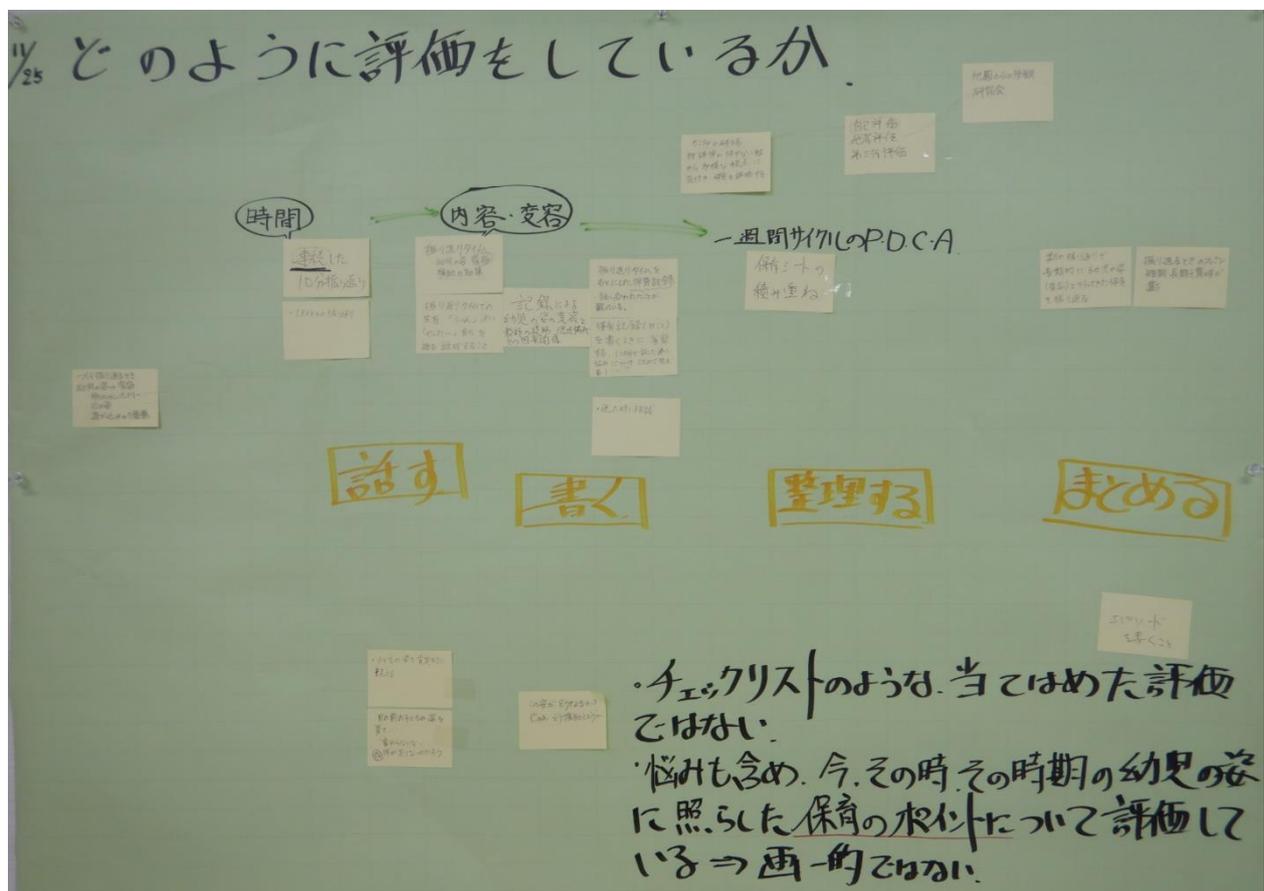
研修事項	検討結果
・アンケート項目⑥のカンファレンス	・「どのように評価を行っているか」についてカンファレンスを行った。昨年度整えた評価のしくみに沿って保育を振り返ることが有効だという共通認識を得た。

<検討プロセス⑩>

今年度は、昨年度の研究の中で整えられた保育を評価するしくみに沿って、保育を振り返り、改善を進めてきた。保育の評価をどのように行っているのかを問う今回のカンファレンスでは、付箋に「連続した10分の振り返り」「振り返りタイムをもとにした保育記録」「保育シートの積み重ね」「振り返るときのスパン」といった、やはり昨年度整えた評価のしくみに関する言葉が並んだ。それだけ本園の教師には、保育を振り返り幼児の姿をもとにして改善を進めているという意識があると言える。付箋をもとにした話し合いの中では、まず、短い時間ではあるものの毎日担任と副担任とで幼児の姿や変容、援助の効果などの情報を共有することや迷ったポイントを伝え合うことが挙

げられた。保育を評価する上で、振り返りタイムを短時間であっても毎日行うことやその中で他の教師が捉えた幼児の育ちや変容を共有することが欠かせないと考えていることが見えてきた。そして、それらを保育記録に残し、省察した内容をのびのび保育シートに書き加えることは、短期的な振り返りとして次週以降の保育の改善に役立っており、他のクラスの教師にとっても貴重な情報源になっていることも語られた。また、「期の振り返り」として長期的な視点で振り返ることも大きな意味があるという意見もあった。それは、のびのび保育シートを長期的に読み直すことで幼児の育ちや変容を捉え直すことができ、さらにそれを支えた援助や教師の心もちについても確認することができたというものであり、他の教師の共感を得ていた。

この話し合いで、教師全員が、昨年度整えた評価のしくみに沿って保育を振り返ることにメリットを感じていたことも大きな意味があった。そして、本園では、悩みや迷いも含め、そのときの幼児の姿に照らして自分たちが行った援助や環境構成を語り合うことが評価であり、チェックリストのような当てはめた評価はなじまないと考えていることが分かった。こうした話し合いを通して、本園では、昨年度整えた保育を評価するしくみに沿って保育の評価を行っているという共通認識となった。



項目⑥「どのように評価をしているか」についてのカンファレンスで話し合われたこと

共通認識を導き出す検討【11月30日研修（白神先生、各クラス担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
・これまでの進捗状況の確認と	・項目⑤について、挙げられた内容を多くの納得が得られる言

課題について	<p>葉にまとめられるよう検討を続けていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後、項目⑦のカンファレンスを行い全ての項目の共通認識を導き出す。それらが本園の評価の考え方であるが、今年度の成果はその評価の考え方を導き出すプロセスにあることを確認した。 ・この期のエピソード事例を書き、協同検討を重ねてやっぱりそうだね「エピソード事例～やっぱりそうだね納得版」を作成する。
--------	---

<検討プロセス⑰>

これまでカンファレンスを重ねながら共通認識を導き出し、あとは項目⑦のカンファレンスのみとなった。7つの項目の共通認識とエピソード事例から得た共感が集まったポイントとの関連を検討し、本園の評価の考え方が明らかになってくると思われる。しかし、どの項目についても1回のカンファレンスで得た認識であるので、それが本園の評価の考え方と決定してしまうのではなく、今後も保育を続けていく中でカンファレンスを繰り返しながら問い続け、より確かなものにしていく必要がある。今年度、その実施が難しいようであれば、来年度カンファレンスを行い、7つの項目についての見直しや検討も含めてブラッシュアップしていくこととする。

また、カンファレンスとエピソード事例の検討から得た共通認識は本園における評価の考え方であり、今年度の研究の成果ともいえるが、もっとも大切なのは、保育に携わる教師がある観点に沿って、自分の考えを語り共感・納得しながら共通の認識を得ていくプロセスであったと考える。

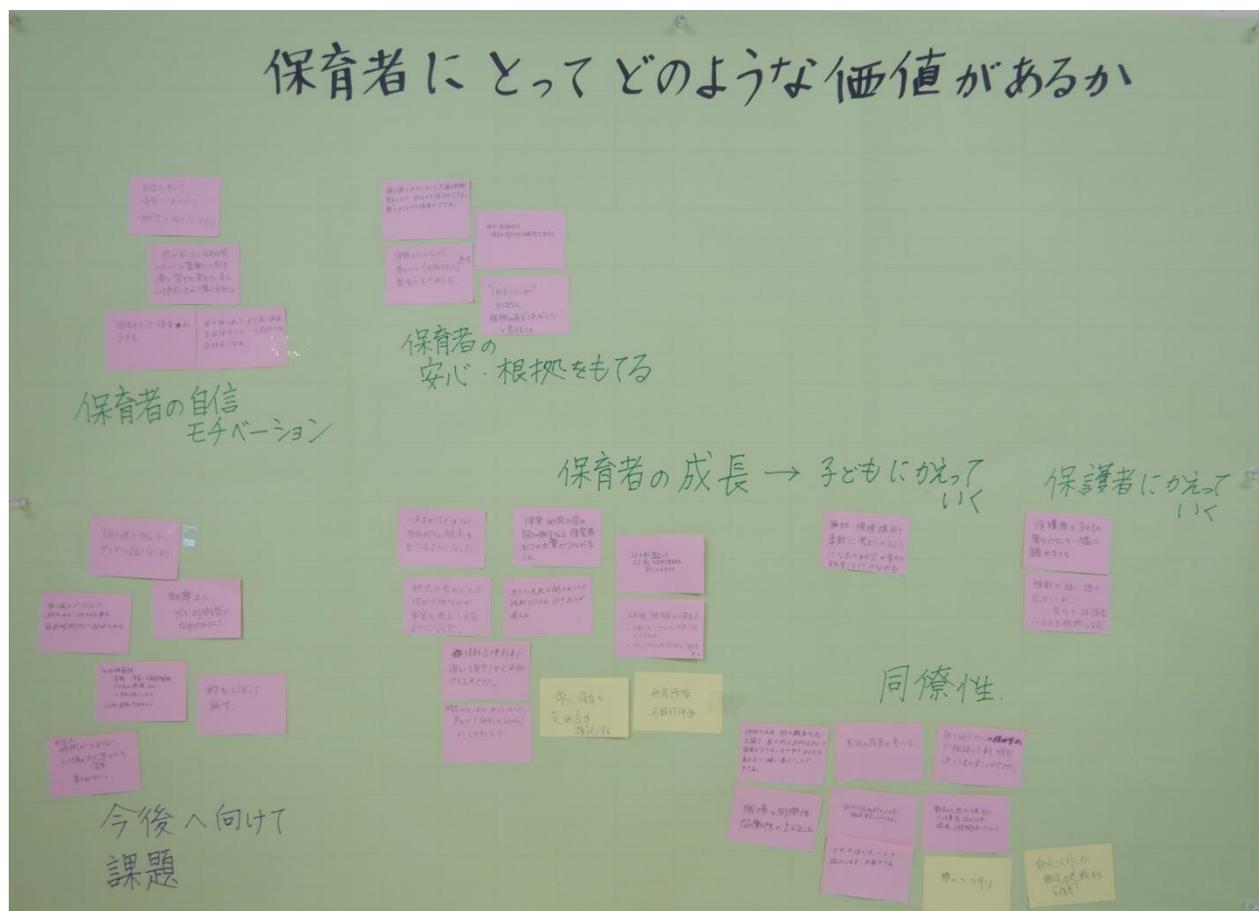
共通認識を導き出す検討【12月16日水曜カンファレンス（各クラス担任・副担任、養護教諭）、12月18日研修（各クラス担任）】

研修事項	検討結果
・アンケート項目⑦のカンファレンス	・「教師にとってどのような価値があるか」についてカンファレンスを行った。その中で、保育を評価することは、教師自身の成長を促すとともに職場の同僚性や協働性も高まることを確認した。そして、その教師の成長が幼児の育ちを支えることにつながり、保護者と一緒に育ちの喜びを分かち合うことができるという循環があるという共通の認識を得た。

<検討プロセス⑱>

このカンファレンスでは、これまでのカンファレンスの中で付箋がもっとも多く並んだ。その内容を見ると、「教師の自信、モチベーション」「教師の安心、根拠がもてる」「教師の成長」「子どもや保護者にかえていく」「同僚性」とグルーピングすることができた。「教師の自信、モチベーション」のグループでは、「目の前にいる幼児一人一人に真剣に向き合い、育ちを支えているという手応えが得られること」「自信をもって保育にあたれる」「日々振り返り、よりよい保育を目指そうという前向きな気持ちになる」といったことが挙げられ、評価のしぐみに沿って保育の評価を行うことが教師の自信やモチベーションにつながっていることが実感として語られた。「教師の安心、根拠がもてる」のグループでは、「情報共有することで安心して保育ができる。楽しみながら保育ができる」「情報をもっていることで落ち着いて（余裕をもって）焦らず幼児と向き合える」「担任・副

担任で保育の方向性を確認し合える」「“これでいいか”ではなく根拠のある“これがいい”と言えること」が挙げられ、情報の共有が幼児の育ちを支えるためのよりよい保育には不可欠と確認された。「教師の成長」とまとめられたグループでは、「独りよがりではない多面的な視点をもてるようになった」「いろいろな意見が聞けることで視野が広がる、引き出しが増える」「情報交換することで遊びを見守る声かけを工夫できる」「幼児の育ちにとって何が大切なのか本質を考えられるようになった」など、自身の変化を述べる教師が多かった。それは、幼児の姿の読み取りや援助の工夫などについての専門性が高まることであり、教師の成長と言える。教師の多くがそのように感じていることが分かった。また、教師自身が成長することによって、幼児の姿をもとに柔軟に援助を考えられるようになり、より育ちを支えることにつながるとともに、保護者にもそのことを伝えることができるというつながりも見えた。それらを「子ども、保護者にかえていく」というグループにまとめた。そして、「普段から困っていること、悩んでいることなど話をしやすい環境・人間関係になっていく」「みんなと同じ方向を向いて保育ができる。その中で、幼児の育ちと一緒に喜ぶことができる」「横のつながり」として、職場の同僚性や協働性が上がることを挙げる教師も多く、「同僚性」というグループにまとめた。最後に、それらのグループで挙げられたことはすべてつながっていることが話題になった。保育を評価することによって、教師は自分の技量を上げることができ、幼児は自分のしようとすることを理解してもらいその実現に向けて援助してもらえ、保護者は我が子が育つ過程や心情を教師と分かち合うことができ、管理職にとっては風通しのよい職員集団がつくられるという、それぞれにメリットがあり、それらが密接につながって循環しているということに多くの共感が得られた。そこで、保育を評価することは、「みんな（教師、幼児、保護者、管理職）が笑顔になれること」だという共通認識を得た。



項目⑦「保育者にとってどのような価値があるか」についてのカンファレンスで話し合われたこと

共通認識を導き出す検討【1月20日研修（各クラス担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
・これまで得た共通認識の確認、整理	・要検討だった項目⑤について、「幼児の実態や育ちを捉えて多様かつ柔軟に援助や環境構成を行っていくこと」とした。また項目⑦「みんなが笑顔になれる」という認識についても、より具体的な表現にしようと「よりよい保育を目指して向上し続けられること」とした。

<検討プロセス⑱>

項目⑤については、カンファレンスで導き出された共通の認識をどのような表現にするのか検討が必要だった。加えて、項目⑦についても、「みんなが笑顔になれる」という表現では抽象的で伝わりにくいのではないかという思いも芽生え、再度検討することとした。

項目⑤については、どの教師も、まず振り返りタイムで幼児の様子や捉えた育ちの姿などの情報を交換・共有することから始めていた。どこで、だれが、どのような遊びをしていたのか、どのような材料や道具を使っていたのか、その遊びがどのように変化していったのか、様子やつぶやきを手がかりに把握していく。その情報があるからこそ、援助や環境構成を工夫することができる。さらに、振り返りタイムで自分が行った援助について語り、その効果や意味を確認したり今後の展開を想像したりして、保育の方向性を相談できることを有意義に思っていた。その積み重ねにより、言葉のかけ方や材料の提示の仕方、場の構成など、援助の幅が広がっていくことが話し合われた。保育の質の向上の捉えを、目の前の幼児に合わせて援助の幅が広がることと再度確認し、「幼児の実態や育ちを捉えて多様かつ柔軟に援助や環境構成を行っていくこと」とした。

項目⑦については、保育の評価によって起こるメリットの循環は教師自身の力量が高まることから始まることをカンファレンスで確認している。評価することで保育に真摯に向き合い力量を高めるといった部分に焦点を当て、「よりよい保育を目指して向上し続けられること」とまとめた。

これにより、マーガレット・カーのアセスメントモデルを参考にした7つの項目について共通認識が全て導き出された。以下の通りである。

マーガレット・カーのアセスメントモデルを参考にした項目	カンファレンスで得られた共通認識
1 何を目的に保育を行っているか	幼児の自ら育とうとする力を支える
2 幼児期の大切な学びの成果をどのようなことだと考えるか	よりよく生きる力の基礎を育むこと
3 保育の中でどのようなことに焦点を当てて援助しているか	幼児のしていることを肯定的に捉える
4 どのように妥当性を確認しているか	職員の語り合いによって共感・合意を得る
5 保育の質の向上をどのように捉えているか	幼児の実態や育ちを捉えて、多様かつ柔軟な援助や環境構成を行っていく
6 どのように評価しているか	本園の保育を評価するしくみ（「保育記録」「カンファレンス」「のびのび保育シート」「期の振り返り」のサイクル）に沿って行う
7 教師にとってどのような価値があるか	よりよい保育を目指して向上し続けられること

これと並行して、3歳Ⅲ期エピソード「年上の余幼児とのかかわりから遊びを広げる」、4歳Ⅶ期

エピソード「幼児のやりたいを支える」、5歳XI期エピソード「つくったものを活かして遊びが広がるように」を教師みんなで読み合いながら、やっぱりそうだね納得版の作成も進めていた。そして、やっぱりそうだね納得版から得られた共感や納得のコメントとカンファレンスで得られた共通認識とを照らし合わせた。

その結果、3歳エピソード事例やっぱりそうだね納得版では、年上の幼児とのかかわりの中でA児の思いを実現できるようにした点が共通認識①「幼児の自ら育とうとする力を支える」、共通認識②『『よりよく生きる力』の基礎を育む』につながり、そのために副担任や4歳クラス担任・副担任と情報を共有しながら連携して場を丁寧に整えた点が共通認識④「語り合いによる共感と合意」とつながると考えられた。

4歳エピソード事例やっぱりそうだね納得版では、幼児同士のかかわりがもてるようにあえて遊びの場所を広げないという援助が共通認識①「幼児の自ら育とうとする力を支える」につながり、道具や材料の種類や出し方を幼児の実態を捉えて変えていくという点が共通認識⑤「幼児の姿をもとにした援助のレパートリーが広がる」とつながることが言えた。

5歳エピソード事例やっぱりそうだね納得版では、幼児が協同して遊びをつくっていけるように教師が立ち位置や役割を考えて援助を行った点が共通認識①「幼児の自ら育とうとする力を支える」、共通認識②『『よりよく生きる力』の基礎を育む』につながり、そのために幼児のしていることを捉える際の教師の心もちが共通認識③「幼児のしていることを肯定的に捉える」とつながることを確認した。

また、どのクラスのエピソード事例にも、振り返りタイムで話し合った内容が記述されており、共通認識⑥「本園の評価の仕組みに沿って（「保育記録、カンファレンス、のびのび保育シート、期の振り返り」のサイクル）」とのつながりも見えた。エピソード事例からは、本園の評価のしくみがしっかり機能していることや、それによって援助の妥当性を確認し改善を進めていくという流れも分かり、共通認識④「職員の語り合いによる共感・合意」も確認できた。

共通認識を導き出す検討【1月27日研修（白神先生、各クラス担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
<ul style="list-style-type: none"> ・導き出された共通認識について ・今後の進め方について 	<ul style="list-style-type: none"> ・項目⑤⑦について、共通認識を具体的な言葉でまとめようとしたが、逆に本園らしさが失われてしまい、抽象的になってしまった。⑦については、当初の「みんなが笑顔になれる」という言葉に戻すことにした。⑤については、再度カンファレンスを行い、検討する。 ・全ての項目のカンファレンスを一通り終え、共通認識を導き出したが、これは現時点のものである。今後、保育の評価を行いながらカンファレンスを行い、さらに共通認識について見直していく必要がある。 ・各期にエピソード事例を書き、納得版を作成している。最後の期にも事例とその納得版を作成することとする。 ・今年度研究のまとめとして、研究冊子を作成する。

<検討プロセス⑳>

カンファレンスから導き出された共通認識を表にまとめてみると、項目⑤と⑦についてはまとめた言葉が抽象的で、共通認識の内容をイメージしにくく、また本園らしさも感じられないという指摘があった。⑦については、カンファレンスの中で、本園らしい言葉になりすぎていないかという反省から、より分かりやすい言葉で伝えようとした経緯があったが、確かにどのようなことを言っているのか逆に分かりにくくなってしまった。このことから、当初の「みんなが笑顔になれる」という言葉に戻すこととした。⑤については、本園では、目の前にいる幼児の実態や育ちに合わせて、教師が多種多様な援助を考えフレキシブルに行っていくことができるようになることが保育の質の高まりと捉えていることが見えてきた。そのことを伝えようとした言葉が、逆に抽象度が高くなったという指摘があった。カンファレンスの中でも、一読しただけではすんなりと内容が入ってこないという声もあった。「保育の質の向上をどのように捉えるか」というこの項目は、カンファレンスを行うときにも内容が難しいという声もあがっていた。問われている内容が、実際に自分がいた保育場面に即して具体的に考えるというよりも、本園の保育で大事にしていることや特徴などを一歩引いて大きく捉えるものであり、日頃そうした視点で保育の振り返りを行っていないことが難しく感じさせたのだろう。そこで、カンファレンスと同時に納得版を作成していたこともあり、納得版ならば全クラスの保育事例を読んでみんなが共感した援助や心もちの部分がマークされているので、それを用いて再度カンファレンスを行うことにした。

このことから、質問項目の内容も考え直す必要があるという課題も見えてきた。そこで、再度質問の文言を見直し、①②の項目について検討を行った。①の「何を目的に保育を行っているか」については、保育を評価するものであることがより伝わるように「何を目的に保育の評価を行っているか」とした。文言を変えても、その視点でカンファレンスを行ったので、共通認識について変更したり再度カンファレンスを行ったりする必要はないと考えた。②の「幼児期の学びの成果はどのようなことか」については、幼児期の学びの成果を問うているのだが、カンファレンスでは幼児期の学びの成果について共通理解を得て、そうした力を育むような保育を行っていくことを確認していた。そのため、共通理解した幼児期の学びを支える保育といえるかという視点で保育を評価することができると考えた。保育を評価する考え方を導き出すために活用した項目だったが、今後、保育の評価を続けながら、共通認識と同様に内容などをさらに検討していく必要がある。

共通認識を導き出す検討【2月3日水曜カンファレンス（各クラス担任・副担任、養護教諭）】

研修事項	検討結果
・アンケート項目⑤のカンファレンス	・要検討だった項目⑤について、各クラスの事例からそれぞれが考えた本園の保育観をもとにカンファレンスを行う。そこで、改めて本園の保育の本質を話し合った結果、「幼児の姿をもとにした援助のレパートリーが広がる」という言葉でまとめられることを確認した。

<検討プロセス⑳>

前期の各クラスの納得版を読み、そこから見えた本園の保育について自分なりの考えをもって、再度、項目⑤「どのように保育の質の向上を捉えるか」についてカンファレンスを行った。その中では、本園では、まず幼児の姿から保育が始まることが挙げられた。教師の意図や願いが優先されるのではなく、目の前にある幼児の姿から教師が願いをもち、援助や環境構成が考えられるという

ことである。そして、これまでのカンファレンスでも共通理解されたように、幼児自身が自分のもっている力を発揮して育っていきけるよう援助していることも語られた。その育ちの姿に何よりも価値をおいているため、教師が前面に出すぎることなく、絶えず幼児の姿を見ながら自分の出番や声がけ、あるいは引くタイミングまで考えている。そして、振り返りタイムなどでPDCAサイクル

マーガレット・カーのアセスメントモデルを参考にした項目	カンファレンスで得られた共通認識
1 何を目的に保育の評価を行っているか	幼児の自ら育とうとする力を支える
2 幼児期に大切な学びの成果をどのようなことだと考えるか	よりよく生きる力の基礎を育む
3 保育の中でどのようなことに焦点を当てて援助しているか	幼児のしていることを肯定的に捉える
4 どのように妥当性を確認しているか	職員の語り合いによって共感・合意を得る
5 保育の質の向上をどのように捉えているか	幼児の姿をもとにした援助のレパートリーが広がる
6 どのように評価しているか	本園の保育を評価するしくみ（「保育記録」「カンファレンス」「のびのび保育シート」「期の振り返り」のサイクル）に沿って行う
7 教師にとってどのような価値があるか	みんなが笑顔になれる

を回しながら、自分の援助の幅が広がっていくことを実感し、そのことにより本園の保育が維持されているという共通の認識に至り、「幼児の姿をもとにした援助のレパートリーが広がる」とした。

以下が、新たに導き出された共通認識である。

これまで同様、カンファレンスと並行して、3歳Ⅳ期エピソード「遊び出しを支えながら、お楽しみ発表会へ」、4歳Ⅷ期エピソード「環境構成で『やりたい』を支える」、5歳Ⅻ期エピソード「幼児の力を信じて待つ」を教師みんなで読み合いながら、やっぱりそうだね納得版の作成も進めていた。そして、やっぱりそうだね納得版から得られた共感・納得コメントとカンファレンスで得られた共通認識とを照らし合わせた。

その結果、3歳エピソード事例やっぱりそうだね納得版では、幼児が遊びを見付けられないときに、幼児自身に働きかけるのではなく材や環境を通して援助しようとした点について、幼児が自ら遊びに向かう姿を大切にしているという共感を得た。それが共通認識①「幼児の自ら育とうとする力を支える」につながると言える。また、材について幼児が自分で決められるようにいくつか選択肢を設けて提案すればよかったと教師が反省していた部分にも共感が集まった。その理由をみると、「提案して終わりではなくよりよい方法を考えている。次につながる」や「日々の保育を次の日以降に活かすことができる」とあり、教師が振り返りを通して考えることによってよりよい援助ができると考えていることが見えた。それは、共通認識⑤「幼児の姿をもとにした援助のレパートリーが広がる」につながるものだろう。

4歳エピソード事例やっぱりそうだね納得版では、アニメのキャラクターになりたいM児の気持ちに寄り添い、本物に近い衣装をつくることよりも、多少違ってM児が納得してなりきる姿を援助した点に共感が集まった。それは、教師がM児のやりたい気持ちを支えることで、その後の遊びを広げていくことができるように考えたからであり、共通認識①「幼児の自ら育とうとする力を

支える」につながる考え方と言える。また、3歳クラス副担任が仲立ちとなって自然と異年齢のかかわりがもてるように援助した点について、異年齢同士のかかわりの中で学んでほしいという同じ心もちを共有しているとして、共通認識④「語り合いによる共感と合意」とつながるものと考えられた。

5歳エピソード事例やっぴりそうだね納得版では、教師の都合で話し合いの時間を決めるのではなく、幼児自身の話したい気持ちを大切に話す場と時間を保障することが幼児の育ちを促すという点に共感が集まり、共通認識①「幼児の自ら育とうとする力を支える」につながると言える。さらに、話し合いの中でお互いに言いたいことを伝え合う様子を側で見守り、必要に応じて言葉をかけた点が、幼児同士で折り合いをつけながらトラブルを解決する力やよりよくかかわる力につながるとして、共通認識②「『よりよく生きる力』の基礎を育む」と通じる。

また、前期と同様に、今期においても3クラスのエピソード事例全てに、振り返りタイムで話し合った内容が記述されており、共通認識⑥「本園の評価の仕組みに沿って（「保育記録、カンファレンス、のびのび保育シート、期の振り返り」のサイクル）」とのつながりも確認できた。そして、全編にわたって、振り返りタイムで話し合われたことや教師の考察に対するコメントの中に、「次に活かすことができる」「よりよい援助を考えられる」といった言葉もよく見られた。そこから、幼児のためにできることを絶えず考え続けていく姿勢が感じられるとともに、自分の力量も高めていくことができる。こうした保育や幼児に対して前向きな姿勢が共通認識⑦「みんなが笑顔になれる」につながっていると考える。

今年度の研究を通して

今年度は、本園における評価の考え方について、カンファレンスとエピソード事例の2つの検討を行ってきた。コロナ禍のため、研究もなかなか思うように進められなかった中で、参考にしたマーガレット・カーのアセスメントモデルにある7つの項目について一通り共通認識を見出せた点は成果と言える。しかし、振り返ってみると、この7つの項目は、評価につながる考え方をみんなで語り合うきっかけともいえるべきもので、この内容で十分かどうかについては今後検討していく必要がある。とはいえ、この項目があったからこそ、一人一人が真剣に問われていることに向き合っただけを書き、語り合い、共感や納得を得ながら共通の認識を導き出すことができたことは事実である。そして、カンファレンスでの語り合いによって、本園の保育のよさを見つめ直し、同じ心もちで保育に向かうことができるようになった。それは、決して押し付けられた保育観ではなく、保育をしながらカンファレンスで語り合う中で、一人一人の中に得られたものである。この点が、この研究のもう一つの大きな成果であると考えている。本園の評価のしくみもそうだが、しくみとしてルーティンのようにやっけていても、その意味と価値は失われる。評価するしくみがあつてよかつたと思えるのは、そのよさや意味を実感しているからである。教師一人一人が保育の評価のよさや意味を実感することが今後も持続可能なものにしていくと考える。評価につながる考え方も同じではないだろうか。その園に所属している職員が、どのように幼児を育てていくのかその目的や方法を自分事として受け止めて、その中で感じた迷いや悩み、喜びなどを語り合い、共感したり一緒に考えたりすることで、その園で大事にしたいことが鮮明になり自覚化され、共有されていくのだから。

来年度は、導き出された共通認識を参考に保育の評価を進めながら、評価観の項目立ても含めて評価観の見直し・検討を行っていく予定である。そして、保育の質の維持・向上や保育の評価に興味をもっている外部や他園の方とも広く意見交換し、研究に活かしていくことができればと考えて

いる。

令和2年度 「子どもを支える保育～評価を通して(2年次～)」 研修ヒストリー

ここでは、研修会議やカンファレンスでどのようなことが検討され、どのように評価観が導き出されたのか、その経緯について示す。

日、場面、参加者	検討事項	検討結果
4月14日 研修 各クラス担任、養護教諭	・今年度研究のテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・育ってほしいと考える姿に照らして、教師が行った環境構成や援助が幼児の育ちを支えるもの、またはそのための改善になっていたのか判断する考え方（保育の評価観）を探る。 ・研究の表題はそのままとする。
4月16日 研修 研究協力者、各クラス担任、養護教諭	・今年度研究のテーマと方法	<ul style="list-style-type: none"> ・『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』（マーガレット・カー著 大宮勇雄・鈴木佐喜子訳 ひとなる書房 2013年）にあるアセスメントモデルを参考とする。 ・アセスメントモデルにある観点に沿って教師間で意見交換をし、本園の保育の方向目標について共通理解していく。「考え方をそろえる」のではなく、それぞれの考えをアウトプットし語り合うことを通して、共通認識を形成していく。
4月21日 5月12日 研修 各クラス担任、養護教諭	・今年度研究の進め方	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症による在宅ワークのため、カンファレンスができない現状を踏まえ、マーガレット・カーのアセスメントモデルに沿ったアンケート調査を行う。 ・何に向かって保育をしているのか目指す目標・方向について、共通理解していくことから始める。 ・アンケート結果をもとに、考えを書いた付箋を持ち寄りKJ法を用いてカンファレンスを行うこととする。
5月20日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	・観点①のカンファレンス	<ul style="list-style-type: none"> ・観点①「何を目的に保育を行っていますか」について、それぞれの教師が園の方針をもとに何を大事にして保育を行っているのか語り合った。その結果、本園では「自らの育とうとする力を支える」ことを念頭に保育を行っているという共通認識を得た。
5月22日 研修 研究協力者、各クラス担任、養護教諭	・観点①のカンファレンスの進め方や内容について振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・観点①②については、そのままの言葉でも伝わるが、それ以降の観点では分かりにくい言葉がある。回答を得ているが、カンファレンスのときには文言を分かりやすいものにして、提示する必要がある。 ・観点一つずつについて語り合うことは、意識し

		<p>てきたことを言語化し、共通認識を形成するには有効であることを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カンファレンスを通して得た本園ならではの方向目標や評価していく考え方を示すエピソードが必要である。
<p>6月9日、11日 研修 各クラス担任、養護 教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・観点③④の文言と内容並びにカンファレンスのもち方の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・観点③にある「焦点」という言葉が分かりにくい。援助する上で大切にしていること、心がけていることなど、それぞれの考えを多面的に語るができるよう場面の違う写真を提示することにする。 ・観点④にある「妥当性の確認」という言葉が分かりにくい。観点③のカンファレンスで、具体的な場面を想起して援助の焦点について考えるならば、その援助をどのように判断するのか考えることを「妥当性」という言葉で表現してもイメージできるのではないか。
<p>6月29日 研修 各クラス担任、養護 教諭 7月7日 研修 研究協力者、各クラス 担任、養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・観点⑤⑥の文言と内容並びにカンファレンスの持ち方の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・観点⑤について、「幼児の成長をどのように捉えているか」とは「保育者がどのように見るか」ということ。幼児を評価することではないことに留意する。 ・観点⑥の「どのように評価しているか」の部分で「評価」という言葉に対するそれぞれのイメージの違いが懸念された。しかし、昨年度から「保育における評価」について研究を進めてきているので、目標に対しての評価であるという視点を伝えることとする。
<p>7月1日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副 担任、養護教諭、教 育補佐員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・観点②のカンファレンス 	<ul style="list-style-type: none"> ・観点②「幼児期の大切な学び(遊び)の成果はどのようなことだと考えますか」について、それぞれが考えていることを語り合った。その結果、本園では「よりよく生きる力の基礎を育てる」ことという共通認識を得た。
<p>7月8日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副 担任、養護教諭、教 育補佐員 7月9日 研修 各クラス担任</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・観点③のカンファレンス 	<ul style="list-style-type: none"> ・観点③「どのようなことに焦点を当てて援助していますか」について、2場面の写真を用意してカンファレンスを行った。場面に沿って具体的に援助を考えていったが、遊びごとに特徴的な援助があるわけではなく、どの遊びの場面でも援助に向かうときに心もちが変わらないという共通認識を得た。それは、「子どもがしていることを肯定的に捉える」とまとめることができる。

<p>7月31日 研修 各クラス担任</p> <p>8月4日 研修 研究協力者、各クラス担任、養護教諭</p> <p>8月7日、21日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・エピソード事例とポイント版の作成について 	<ul style="list-style-type: none"> ・エピソードは、子どもの姿の読み取りから抱いた教師の願いと、それをもとにした環境構成や援助について詳しく記述する。なぜこのエピソードを取り上げたのか、その理由が評価の考え方につながっていくと思われるので、蓄積していくことによって評価の考え方の根拠となる。 ・エピソードの中で多くの教師が共感した本園らしい考え方や援助はカンファレンスで得た共通認識とつながるのではないかと考える。エピソードを教師間で読み合い、エピソードに本園らしい特徴に印をしたバージョンも作成する。
<p>8月21日、27日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教育目標、「こんなふうに育ってほしい」、目指す方向性の関係の整理 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育目標や、それを期ごとに具体的に表した年間指導計画の「こんなふうに育ってほしい」という姿は、目標とする幼児の姿である。共通認識として導き出しているのは保育の目指す方向性であり、目標とする幼児の姿を実際の保育場面ではどのように捉え、その姿を支えるためにどのように援助していくのかといった考え方である。 ・そうした援助に向かう考え方が明らかになると、その考え方が保育を評価する際の視点になると考える。
<p>9月2日 研修 各クラス担任、養護教諭</p> <p>9月14日 研修 研究協力者、各クラス担任、養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・エピソードポイント版の形式とネーミングについて 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの教師がマークしコメントした内容は、全部脚注として残す。マークが重なった箇所は色を濃くする。マークの色が濃かった部分にコメント欄を設け、考察を記す。 ・ポイント版を「エピソード事例～やっぱりそうだね納得版」と名付けることにした。
<p>9月9日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・観点④のカンファレンス 	<ul style="list-style-type: none"> ・観点④「どのようにして妥当性を確認しているか」について、カンファレンスを行った。その結果、「職員の語り合いによる共感・合意」という共通認識を得た。
<p>11月5日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・観点⑤⑥⑦の文言について 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育をどのように判断するのか、その考え方を明らかにしていくための観点だが、「幼児の成長」という尋ね方だと幼児を評価するよう見えるのではないかという指摘があった。 ・「どのように保育の質の向上を捉えるか」といっ

		た保育の質にかかわることが分かる文言にし、カンファレンスを行うことにする。
11月18日 水曜カンファレンス各クラス担任・副担任、養護教諭	・観点⑤のカンファレンス	<ul style="list-style-type: none"> 「どのように保育の質の向上を捉えているか」についてカンファレンスを行った。その中で、自分一人の考えや判断で保育を行うのではなく他の教師と共通の認識を得て保育を行うこと、幼児や遊びの様子を見て援助や環境構成の内容を工夫していくこと、保育の手応えを幼児の姿から得ることなどが本園では保育を行ううえで欠かせないこととして共通の認識を得た。 観点⑤の共通認識として端的にまとめるには内容が多かったことから、その後検討することとなった。
11月25日 水曜カンファレンス各クラス担任・副担任、養護教諭	・観点⑥のカンファレンス	<ul style="list-style-type: none"> 「どのように評価を行っているか」についてカンファレンスを行う。昨年度整えた評価のしくみに沿って保育を振り返ることが有効だという共通認識を得る。
11月30日 研修 研究協力者、各クラス担任、養護教諭	・これまでの進捗状況の確認と課題について	<ul style="list-style-type: none"> 観点⑤について、挙げられた内容を多くの納得が得られる言葉にまとめられるよう検討を続けていく。 今後、観点⑦のカンファレンスを行い全ての観 points の共通認識を導き出す。それらが本園の評価の考え方であるが、今年度の成果はその評価の考え方を導き出すプロセスにあることを確認した。 この期のエピソード事例を書き、協同検討を重ねて「エピソード事例～やっぱりそうだね納得版」を作成する。
12月16日 水曜カンファレンス各クラス担任・副担任、養護教諭 12月18日 研修 各クラス担任	・観点⑦のカンファレンス	<ul style="list-style-type: none"> 「教師にとってどのような価値があるか」についてカンファレンスを行った。その中で、保育を評価することは、教師自身の成長を促すとともに職場の同僚性や協働性も高まることを確認した。そして、その教師の成長が幼児の育ちを支えることにつながり、保護者と一緒に育ちの喜びを分かち合うことができる循環があるという共通の認識を得た。
1月20日 研修 各クラス担任、養護教諭	・これまで得た共通認識の確認、整理	<ul style="list-style-type: none"> 要検討だった観点⑤について、「幼児の実態や育ちを捉えて多様かつ柔軟に援助や環境構成を行っていくこと」とした。また観点⑦「みんなが笑顔になれる」という認識についても、より具体

		<p>的な表現にしようとして「よりよい保育を目指して向上し続けられること」とした。</p>
<p>1月27日 研修 研究協力者、各クラス担任、養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・導き出された共通認識について ・今後の進め方について 	<ul style="list-style-type: none"> ・観点⑤⑦について、共通認識を具体的な言葉でまとめようとしたが、逆に本園らしさが失われてしまい、抽象的になってしまった。⑦については、当初の「みんなが笑顔になれる」という言葉に戻すことにした。⑤については、再度カンファレンスを行い、検討する。 ・全ての観点のカンファレンスを一通り終え、共通認識を導き出したが、これは現時点のものである。今後、保育の評価を行いながらカンファレンスを行い、さらに共通認識について見直していく必要がある。 ・各期にエピソード1事例を書き、納得版を作成している。最後の期にも事例とその納得版を作成することとする。 ・今年度研究のまとめとして、研究冊子を作成する。
<p>2月3日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・観点⑤のカンファレンス 	<ul style="list-style-type: none"> ・要検討だった観点⑤について、各クラスの事例からそれぞれが考えた本園の保育観をもとにカンファレンスを行う。そこで、改めて本園の保育の本質を話し合った結果、「幼児の姿をもとにした援助のレパートリーが広がる」という言葉でまとめられることを確認した。